

千代さんはすし辰で十四歳の時から働いて三十年もいたのだから、タカのことをいちばん知っている人に違いない。千代さん自身はタカに見込まれて三十年も頑張ったのだから、そうタカのことを嫌うとかいやがるとかいう感情はないのだが、仕事のきつさとタカの厳しさがいまどきの者に受け入れられるはずがないということがよくわかっているのであろう。

しかも、男二人、女二人の子どものうちの末っ子の加代子は人一倍、かわいいものである。「かわ

あ。聞いてみますわ、その加代子の友だちになあ」

福代は、空振りやな、とひとりごちながら、ため息まじりに店へ戻った。

「あとのあては検番の芸者でいちばん顔の広い、弁慶ねえさんか、『出鱈目(でたらめ)』のママに聞かないかねえ」

福代は帰るなり、倉之助にこう言った。

倉之助は帳場の脇の応接間と呼ばれている六畳の部屋でツメを切っていた。ツメを切るために敷いている新聞の記事をつい読み読みであるか

いい子には旅をさせろ」とはいうが、別にすし辰でしごかれることはないであろう。自分は若い時から苦労したけれど、加代子にはふつうの暮らしをさせてきたし、いい縁談でもあれば、きちんと支度をして、嫁にも出して、しあわせになってもらいたい。

賢い千代の目先はいつもきいていたのである。義理があっても、すし辰だけは、加代子を働かさないぞ出せない。

「若奥さん、ちょっと二、三日待ってもらおかなら、もうきつきから三十分くらいはツメを切っているのかもしれない。

「ふん、ふん、弁慶なあ。きようはおるか？」

うわの空である。

「お座敷の予約やない、仲居さんのことや」

「弁慶、もう芸者辞めるんか？ 仲居さんにするてか？」

「アホ、もう知らん！ ようやってられん」

商売のこととなるといつもこのとおりであった。相談するにも何事もこんな調子で、あのタカにこんなに商売にうとい息子がなぜいるか！と

わが夫ながら情けなく、事のたびにため息ばかり
つのが福代の日課となっていた。

「あーまたやられたわ！ いつの間にやろ！」

倉之助がツメを切りそこなうほどの大きな声で

突然、タカが応接間に入ってきた。手には竹ぼう

きを持ったままだ。

「おかあはん、竹ぼうき持って、なんや。討ち入り

か？ ここは土間とちがうで！」

倉之助は顔をしかめた。福代はそこから逃げ出

したい思いだったが、タカはキツと福代をにらん

るまいと言いたげであった。

「ある」

タカの声は地声である。かなりの剣幕である。

真砂屋というのは、近所のうどん屋で、タカの

すぐ下の妹の嫁ぎ先。タカの妹はこの真砂屋

のおっさんこと高下五郎の妻となっていた。タカ

と妹のシマは仲が悪いわけでもなかったが、タ

カとこの真砂屋の五郎は犬猿の仲であった。

原因は終戦の日の玉音放送である。

真砂屋も近所の者も、ラジオのあるすし辰の

で、

「福代、またやられたで！ 表の盛り塩。右のん

も左のんも、また真砂屋（まさごや）のおっさん

の下駄に踏まれてしもたで」

「またですか…」

「いかん、いかん。いつの間にやろ。さつきまで竹

ぼうき持って表で見てたのに、ちよつとの間や

で。おトミが私を呼ぶから、配膳場に行つて、も

の五分や」

「真砂屋のおっさんつて、証拠はあるんな？」

倉之助はそういつもいつも真砂屋ばかりでもあ

帳場脇の応接間に集まったのだが、そこで、タカ

は話の内容を知るやいなや、号泣している真砂

屋の五郎のすぐ脇で「万歳！」と叫んだのである。

五郎が憤慨して、万歳をまだ繰り返しているタ

カにビンタをくらわせた、とその時、タカは負け

ずに真砂屋の五郎をすぐそばにあったハタキの枝

でしたたか叩きのめしたのである。

その日以来、もう二十五年経っているのに、二人

は口もきかない。そして、真砂屋はちよくちよく

タカが大事に盛る塩を踏みに来るのである。

福代が昭和二十八年に、このすし辰に嫁に来てからは、朝の盛り塩というのはだんだんに福代の役目になっていたが、お客が二、三日入りが少ないと、「縁起でもないわ、福代、あんたの盛り塩の仕方がいかんのや！」と言いながら、タカがしなおすことが時々あった。

真砂屋が下駄で踏み潰してゆくのは、決まってタカが盛り塩をした日である。福代は塩を壊された試しはない。

斜め四軒向こうの「真砂屋うどん」ののれんの影昔、すし辰の大得意筋から店の改築祝いにももらったものだったが、これをもらったとたんに、タカの夫の竹之助は株で大もうけができた、働き者の福代がグウタラ息子の倉之助の嫁になってくれた、お伊セが勤めに来てくれた…とにかくいいことばかりが続いたというのである。

ジnkスというものであろうか。タカは玄関先でこの籐の椅子に腰掛けて通りを眺め、フリのお客様の到来を待っているのである。店が満員の日でも、なのである。「いつトケになるかわからん」というのもタカの

からのぞいているに違いない。

タカは、いつでもその隙をつかれて、踏まれてしまうのが口惜しくて仕方がない。

今度こそは明日こそはと思ったのであろう。タカは「明日も私が盛るで！」と言い残し、また玄関先の椅子のところに戻っていった。

野球の好きなお伊セさんが「あれは野球の監督席みたいなもんやな」といつも言っているタカの表の椅子である。古い籐でできた椅子だが、タカにとっては縁起のいい椅子である。その椅子は、

口癖であった。トケとはもちろんキャンセルのこと。

客がすし辰の軒先に入るまで、「安心はでけん！」というのが、タカの考えだったのである。

(三)

「きょうは土曜やのに、珍しいなあー」
おトミさんが長い一階の表廊下に雑巾をかけるながら、玄関の土間をはいているお伊セさんに声をかけた。

「うん、そうやな、少ないな。お客さん。ほとんど

どまだ空やで、部屋。御家さん、機嫌悪いわ。真砂屋はんもなんで塩壊しはるんやろう！ 熱心やな。熱心もいかん熱心やで」

おいせさんは御家さんが気の毒だというのである。

「ちよつと殺生やわ」

トミちゃんはそう言うのと、雑巾バケツをゆつくりと持ち上げて、水を替えに行つた。

トミちゃんは三重、おいせさんは大阪で、二人とも言葉も近く、不思議と気が合うのである。トミ

ゆつさり持つて廊下のところに戻つて来た。

「雑巾がけはおトミ、障子のさんのハタキかけや土間を掃くのは、おいせ。適材適所というやっちゃ」

よくタカはこう言ったものである。

ヒマな時は、とりわけ雑巾がけに時間をかけていいわけだから、こういう時、トミちゃんは実に根気よく、廊下や階段がほんとうにピカピカになるまで雑巾がけをしたものであった。

「ほーい、おいせはん、何してる？」

ちゃんのんびり屋、おいせさんがコマネズミのように気ぜわしいのに。相性とは妙なものである。

「ベンケイさん、イマスカ？」

おいせの背後で聞いたことのない女の声があった。

「へっ？」

「ベンケイさん、オネガイシマス」

おいせさんが竹ぼうきを持ったまま振り返ると、そこには自分の背の二倍もあるかと思えるくらい背の高い外国人の姿があつた。

トミちゃんが汲み替えた雑巾バケツをゆつさり

トミちゃんは、ドシンとバケツを廊下の真ん中に置くと、見たこともない背の高い外国人と話しているおいせさんの姿に驚いたのである。

おいせさんはトミちゃんの頓狂な声にケラケラと笑つて、また大きな軽やかな声で、

「トミちゃん、この人、女ヨシツネはんやで！」

「女ヨシツネはん？」

「うん、カナダから『ベンケイ』探しに来はったんやつて」

「へえ」

「埒があかない」という言葉があるが、この

闖入者の話していることは、お伊せさんやトミち

やんだけでは、ほんとうに埒があかないだろう。

お伊せさんはちらりと帳場の掛け時計を見て、

「もう二時やな。聡子ねえちゃんが帰って来る頃

やな。このガイジンさんの言うこと、ように聡子ね

えちゃんに聞いてもらおう」

お伊せさんたちは、すし辰の聡子が長女なので、

ねえちゃんと呼ぶのである。聡子は十六歳。近く

の町、丸亀の高校にバス通学しているのだった。

「ほんでも、そんなに待ってもらおう義理もないや

真砂屋のシマのところに行っているのだ。

もちろん、五郎はいない。いないから真砂屋を

のぞくのだ。五郎は一時過ぎから五時くらいまで

毎週土曜の囲碁会に行くのである。

いない時間にタカはシマのところへ行き、うど

んの脇に置く、ちらし寿司の仕込みやのり巻の作

り足しを手伝いながら、思う存分、五郎の悪口を言

うのである。おとなしい妹のシマは、その悪口を

ただ「へえ、へえ」と聞いている。寿司の仕込み

が楽になるので、そのくらいは我慢しなくては…

ろ？」

トミちゃんは心配そうである。

「うん、まあそれはそうやけど。泊まってくれる
かもしれないやで」

お伊せさんは、客が一人でも増えれば、それで

ええやないかとのん気にまた笑った。

(四)

お伊せさんもトミちゃんもタカがいれば、すぐ
に結論が出るはずなのは知っている。

タカは土曜の午後は籐椅子からしばし離れて、

とおも
と思っているくらいである。自分の夫の悪口を聞
いても、タカの口からなら、なんとなく許せる。

シマはタカを頼りにしているのである。

そのタカが聡子と道で一緒になったと言いなが

ら、にこにこしながら帰って来た。背の高い外国人

は、玄関の土間にあるソファアのところ、お伊

せさんの出したお茶を飲んでた。

(以上12月3日放送分)